

主 題：十字架にかかるために来られた
 聖書箇所：ヨハネの福音書 12章20－36節

イエス・キリストがお生まれになったとき、天使たちがこのように告げました。「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそキリストです。」(ルカ2：11)と。イエス・キリストは人をその罪から救うためにこの世にお見えになったお方です。その時が近づいてきています。そのときにイエスは弟子たちに、また人々にお話しになりました。この会話を通してイエスは彼らに再びご自分がだれであるかを明らかにされました。イエスがまさに救い主であること、この世に送られた唯一の救い主であることを人々に明らかにされるのです。今日、私たちはこのヨハネ12：20－36を通して、三つのことを学んで行きます。これらを通して私たちは再び、イエス・キリストこそが唯一の救い主であることを見て行きます。それをイエスは教えようとされたのです。

☆どうしてイエスが約束の救い主であることがわかるのか？

A. イエスのみわがが明らかにする 20－26節

ここにはイエスのみわがが記されています。これからイエスは何をするのかをお話になったのです。今の私たちにとってはそれはもうすでになされたことですが、この当時の人々にイエスはこれからすることを話されたのです。そのみわがを通して私たちは、イエスが言われていたように、天使が告げたようにイエスが「救い主」であることを知るのです。そのみわがはイエスが救い主であることを証明しています。20－22節を見ると「さて、祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシヤ人が幾人かいた。：21 この人たちがガリラヤのベツサイダの人であるピリポのところに来て、「先生。イエスにお目にかかりたいのですが。」と言って頼んだ。：22 ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポとは行って、イエスに話した。」とあります。おそらくエルサレムの神殿の異邦人の庭の中でこのような話がなされたのです。そこには異邦人が入ることができたのです。彼らはイエスにお会いしたいとピリポに頼み、ピリポはアンデレに話してその願いを届けるのです。するとイエスはこのように答えられます。23節「すると、イエスは彼らに答えて言われた。「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」と、彼らの願いに対するYES、NOではなく、わたしがこの世に来たその目的を果たすときが来たのだと言われたのです。ここでイエスのご自分のことを「人の子」と呼んでおられます。このことばは福音書の中に83回も出てきます。イエスのご自分をこのように呼ばれたのです。「人の子」とは救い主の称号です。旧約聖書の中にダニエル書がありますが、その中の7：13－14に「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。：14 この方に、主権と栄光と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」と「人の子」とあります。ですから、旧約聖書を知っている人々には「人の子」というとそれが救世主を指していることを知っていました。待ち焦がれていたメシヤのことを人々は覚えたのです。

また、イエスが「人の子」ということばを使われたときにご自分がメシヤであることを明らかにしただけでなく、人であること、つまり、神でありながらへりくだって人となったというそのへりくだりを含めて、ご自分のことを「人の子」と言われたのです。その「人の子」が栄光を受ける時がやって来たと言います。この地上でなすべき働きを終えて父なる神のもとへ帰るということです。この世に来た目的を果たすその時が今まさに来ている、つまり、十字架が近いということです。

24節からイエスはもう一度、ご自分がこの世に来た目的について話しておられます。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみかたです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」。24節に「麦のたとえ」があります。その当時の人々がよく分かるたとえをイエスは話されました。これは今の私たちにも分かることです。麦の穂が地に落ちてそこで分解し芽を出して行くのです。そして実を实らせて行く、そのことをイエスは言われたのです。これを通してイエスはこれからご自分が何をなさそうとするのかを明らかにしたのです。麦の穂がそうであるようにわたしも死ぬと。しかし、死ぬことによって人々に多くの実をもたらすのだと言われます。実とは永遠のいのちです。わたしは死ぬけれどそれによって人々に永遠のいのちを与えることができるのだということです。

そして、その永遠のいのちをどうすれば得ることができるのか25－26節に記されています。「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。」、25節には「自分のいのち」と「永遠のいのち」のふたつの「いのち」が出て来ます。「自分のいのち」

とは肉体のいのちです。この地上で生きている肉体のいのちのことです。「永遠のいのち」は神のもっておられる「いのち」のことです。この地上でのいのちを愛するか憎むかによって自分の永遠が決まるというのです。イエスは何をお話になったのでしょうか？ 私たち人間は生まれながらに自分を愛する者です。自分中心です。自分よりも他の人が愛されることに我慢できない者です。いつも自分が大切なのです。そのように生まれ育って来たのです。聖書の中のどこを見ても自分を愛しなさいとは教えていません。聖書が教えるのは、他の人を、隣人を自分と同じように愛せよということです。イエスが言われる「自分のいのちを憎む」というのは利己的で自分のことしか考えないことから変わらなければならないということです。マタイ 10 : 37には「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」とあります。両親を敬わなくてもよい、子どもたちを愛さなくてもよいということではありません。どのように大切にしておいしい者であってもそれよりも神を第一に愛しなさいということを行っているのです。それが救いの祝福をいただく方法なのです。もし私たちに神よりも大切な存在があるなら、それは偶像であると言えます。自己中心の生き方を続けるなら永遠のいのちを失うということ、しかし、何よりも神を愛するなら永遠のいのちを得るのだということをイエスは言われるのです。マタイ 16 : 26にはこのように記されています。「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」。同じことがマルコ 8 : 35 - 38 でこのように言われています。「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。:36 人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。:37 自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。:38 このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」。あなたにとって何よりも大切なものは永遠のいのちではないかと言われています。世界中のほしいもののすべてを手に入れたとしても永遠のいのちを失ったらそれが何になるのか、すばらしい仕事に就き、人々からの名誉を得たとしてもあなたが死んだらそれは忘れられて行く、そのような一時的なものを求めて、そのために永遠のいのちを犠牲にしてしまったら取り返しがつかないと言うのです。私たちは自らの永遠について考えなければなりません。感謝なことに神は私たちのうちに永遠に対する思いをくださったのです。私たちは死んでからのことを考えます。神がそのように人間を造られたからです。神は私たちに常に思い起こすように働かれます。永遠への備えをしなさい、地上のいのちを愛することよりも永遠のいのちをもつことを求めるべきだと言われるのです。悲しいことに私たちの周りにはどれほど多くの人たちが永遠の地獄に向かっているかです。彼らが考えていることはかつての私たちがそうであったように、この地上のことだけです。

ルカ 17 : 32 に「**ロトの妻を思い出しなさい。**」と書かれています。なぜこのことが語られているか、ロトとその妻はソドムとゴモラという罪の町に住んでいました。神の使いがやって来て神がこの町を滅ぼすから逃げなさいと言います。そして、何があつても振り返ってはならないと命じました。家族で逃げ行く途中、神が町にさばきを下されたときロトの妻は町を振り返って塩の柱になったことが旧約聖書に記されています。ロトの妻はまだソドムとゴモラに思いがあつたのです。そこから離れたくなかつたのです。ですから、そのようなことがあつてはならないと「**ロトの妻を思い出しなさい。**」と言われたのです。もし、あなたが今どれほどの地位や財産をもっていたとしても、キリストにある永遠のいのちを得ておられないなら、後悔しても後悔しきれない状態にあるのです。なぜなら、次の瞬間あなたに何が起こるか分からないからです。神が私たちに命じておられることは、自分のいのちを愛するのではなく、私たちが造り私たちが愛し、私たちのために救い主を送ってくださった神を心から愛することです。神を第一にしているか、永遠の備えができていくかと問われているのです。

イエスはこのように言われています。「**もしだれでも、わたしとわたしのことばとを恥と思うなら、人の子も、自分と父と聖なる御使いと栄光を帯びて来るときには、そのような人のことを恥とします。**」、ルカ 9 : 26 です。私たちがイエスを信じる前のことを思い起こしてみると、どんなにすばらしい神であるかを何度聞いても信じようとはしませんでした。宗教を信じるなんて弱い人がすることであるとか、信じているというのは恥ずかしいことだとか、そのような思いもあつてなかなか信じようとしなかつた。そして、信じたあとも自分がクリスチャンであるというのに抵抗がありました。人がどう思うか分からないから…。主のことを誇るよりも自分がどう見られているかを優先してしまうのです。イエスのことを恥とするなら、イエスもあなたのことを恥とすると言われるのです。まだイエスを信じておられない方はイエスのすばらしさがまだ分かつておられないから、イエスを信じることを恥かしいと思うのです。クリスチャンである方、あなたはキリストを誇っておられますか？もし、キリストを恥じているなら悔い改めるべきです。神を愛し神を第一とすることが救いを得る手段であると教えます。

もう一つ付け加えると、26節に「**わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わた**

しがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。」とイエスは言われました。神を愛すること、それは具体的にどのように生きることなのかを教えてください。「わたしについて来なさい」と。イエスを信じるとはどういうことか、永遠のいのちを自分のものにするとはどういうことなのか、それは、自分を喜ばせる歩みを止めて神を愛し神に従って生きて行くことです。イエスが私の主人であるからこの方に従って行きますという選択をすることです。「わたしに仕えるというなら、わたしについて来なさい」、それが弟子だと言います。みことばはそのように教えるのです。神を第一とするということは神に従って行くことです。ヨハネは第一の手紙5：3でこのように教えています。「**神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。**」。

イエスは弟子たちにこれから何をするのかを教えてください。それを通して今の私たちに、イエスこそが真の救い主であることを教えてください。イエスはご自分が死ぬことによって、私たちに永遠のいのちを備えてくださったのです。

B. イエスの生涯が明らかにする 27-33節

27節～「**今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ。この時からわたしをお救いください。』**と言おうか。いや。このためにこそ、わたしはこの時に至ったのです。：28 父よ。御名の栄光を現わしてください。」とこれはイエスの祈りです。この祈りにゲッセマネでのイエスの祈りを見ます。イエスの中にはずっとこの苦悩があったのです。罪の身代わりとなることの苦悩です。パウロはⅡコリント5：21にこのように言っています。「**神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。**」。イエスが私たちの身代わりとなってくださったことです。イエスはこの目的のためにこの世に来てくださったことは24節から見て来ました。その上でどうしてこのような祈りがなされたのでしょうか？イエスはどのような罪も憎んでおられました。父なる神を悲しませることがイエスにはどれほどの辛さ悲しさであったことか、私たちには理解できないことです。なぜなら、私たちが平気で罪を犯して神を悲しませているからです。イエスはどんなに小さな罪であってもそれがどれほど神を悲しませるかを知っておられたのです。イエスは常に神のみこころに従うことだけを考えてそのように歩んで来られました。それがこのイエスの祈りです。イエスが神に求めたことは、別の方法で主のみこころをなすことはできないのかということ。罪人である人間の身代わりとなって神を悲しませることについて、別の方法はないのかと。イエスの生涯は完全に罪から離れたものでした。どのような小さな罪もなかったのです。しかし、イエスは言います。「**このためにこそ、わたしはこの時に至ったのです。父よ。御名の栄光を現わしてください。**」と、自分の考えを神のみこころより優先することをされませんでした。常に神の栄光が現わされることを願いました。

それに対する父なる神のお答えは、28b-33節「**そのとき、天から声が聞こえた。「わたしは栄光をすでに現わしたし、またもう一度栄光を現わそう。：29 そばに立っていてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言った。ほかの人々は、「御使いがあの方に話したのだ。」と言った。：30 イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためにではなくて、あなたがたのためにです。：31 今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。：32 わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」：33 イエスは自分がどのような死に方で死ぬかを示して、このことを言われたのである。**」でした。天から声がしたことはこれまでに2回ありました。1回目はイエスがバプテスマを受けられたときです。「**また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」**」(マタイ3：17)、2回目はイエスの山上の変貌のときです。「**彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい。」**という声がした。」(マタイ17：5)。そして、3回目がこのところ。すなわち、十字架にかかる前です。神はこれまでイエスを通してご自分の栄光を現わして来られました。イエスが忠実であったからです。私たちが神の栄光を現わそうとするなら、神に忠実に生きて行くことです。神はここで十字架によってもわたしの栄光を現わすと言われたのです。十字架が神のみこころだからです。そのことを言われたのです。このような天からの声によって、神がどれほどイエスを喜んでおられたのかが分かります。そして、イエスは言います。「**この声が聞こえたのは、わたしのためにではなくて、あなたがたのためにです。**」と。イエスは自分がだれであるかを知っておられました。イエスがだれであるかを知る必要があったのは弟子たちであり、群衆だったのです。イエスが真の救い主であることを知るのです。

そして、イエスは31節に今がさばきのときだと言われています。なぜなら、もう救い主は来たからです。そして、救いはどうすれば得ることができるのかをイエスは明確に教えられました。メッセージが明確に語られることによって、救いとさばきがはっきり示されるからです。このようにすれば救われると聞いたとき、それに従わなければそこにあるのはさばきです。人々はイエスが語られるメッセージによって、どうすれば救われるのかがはっきり分かったのです。そして、聞いた者には責任があります。その救いを拒めばさばきがあるということです。「この世を支配する者は追い出される」とあります。

これはサタンのことです。救われる者が増やされてサタンはそのもっている力を失って行くということです。神はその恵みによって多くの人を救いへと導いてくださるのです。この場面をもう一度思い出して見ましょう。なぜこのような話がなされたのか、ギリシャ人がやって来たのです。ユダヤ人ではなく、異邦人でした。イエスの十字架以後、救いはユダヤ人だけでなく異邦人に、私たちに及んだのです。そのようにサタンの支配が徐々に狭められて行くのです。イエスはだれであろうと、人種や国籍に関係なく、イエスを信じるすべての者を救いへと導いてくださるのです。

イエスの完全な生涯、それがイエスがだれであることを教えてくれました。そして、3番目、

C. イエスの身分が明らかにする 34-36節

34節「そこで、群衆はイエスに答えた。「私たちは、律法で、キリストはいつまでも生きておられると聞きましたが、どうしてあなたは、人の子は上げられなければならない、と言われるのですか。その人の子とはだれですか。」、ユダヤ人たちの頭の中には旧約聖書の教えがありました。イザヤ書の9章、エゼキエル書37章、ダニエル7章です。イザヤ9：6、7「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。：7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」と、来られる救世主は王座につかれて、その王座は永遠に続くということを教えているのです。エゼキエル37：25にも「彼らは、わたしがわたしのしもべヤコブに与えた国、あなたがたの先祖が住んだ国に住むようになる。そこには彼らとその子らとその子孫たちとがとこしえに住み、わたしのしもべダビデが永遠に彼らの君主となる。」とあり、そして、ダニエル7：13、14にも「私がまた、夜の幻を見てみると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。：14 この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」とあります。つまり、このようなみことばを学んでいたユダヤ人にとっては、来られる救世主は永遠の王国を築くのだということを知っていましたから、彼らは戸惑ったのです。イエスは人の子、救世主であると言われた、しかも、その救世主はこれから殺されて行くという、救世主は永遠に留まるはずだと思っていたのに、聖書の教えと違っているのではないかと彼らは主張したのです。本当の救世主はこの地上に留まり続けるはずだからと。

それに対してイエスは何と言われたか、35-36節「イエスは彼らに言われた。「まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。：36 あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」イエスは、これらのことをお話しになると、立ち去って、彼らから身を隠された。」イエスは群衆に「わたしは光である」と言われました。ヨハネの福音書1：1-4に「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。：2 この方は、初めに神とともにおられた。：3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。」とあります。すべてを造られた神は「光」であるとヨハネは教えたのです。そして、イエスはここで「わたしは光だ」と言われたのです。イエスの主張はご自分がだれであるか、光、つまり神であることを明らかにされたのです。ヨハネ第一の手紙1：5にも「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。」とあります。イエスは「まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。」とご自身のことを言われ、「光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」と、人々に招きをされるのです。初めにこの群衆に話したときもイエスは彼らが救われるようにと招きをされましたが、ここでも同じように招きをしておられるのです。今ならまだ罪赦される、今ならまだ救いが与えられる、今なら永遠のいのちが与えられる、だから、救いを求めてわたしのところに来なさい、わたしがそれを与えるからと言われるのです。チャンスがあるうちに自らの永遠の備えをし、この永遠のいのちを自分のものとするようにとイエスは話されたのです。

チャンスはあるのです。救いは与えられるのです。そのためにはここにあるように「光の子どもとなるために、光を信じなさい。」と言われます。決心がいるのです。このイエス・キリストを自分の救い主として、自分の神として、自分の主として信じ、この方に従って行こうとすることです。自分のいのちを愛する者はそれを失います。でも自分のいのちを憎む者は永遠のいのちを得ます。自分のいのちよりももっと愛すべき方がいるのです。私にいのちを与えてくださった方、私を造ってくださった方、そして、私を罪より救い出してくださったこの救い主です。どうぞ、イエスを心から受け入れて永遠のいのちをご自分のものにしてください。でなければ、取り返しのつかないことになってしまいます。